

# メタルケーブルの未利用芯線コストの 扱いについて

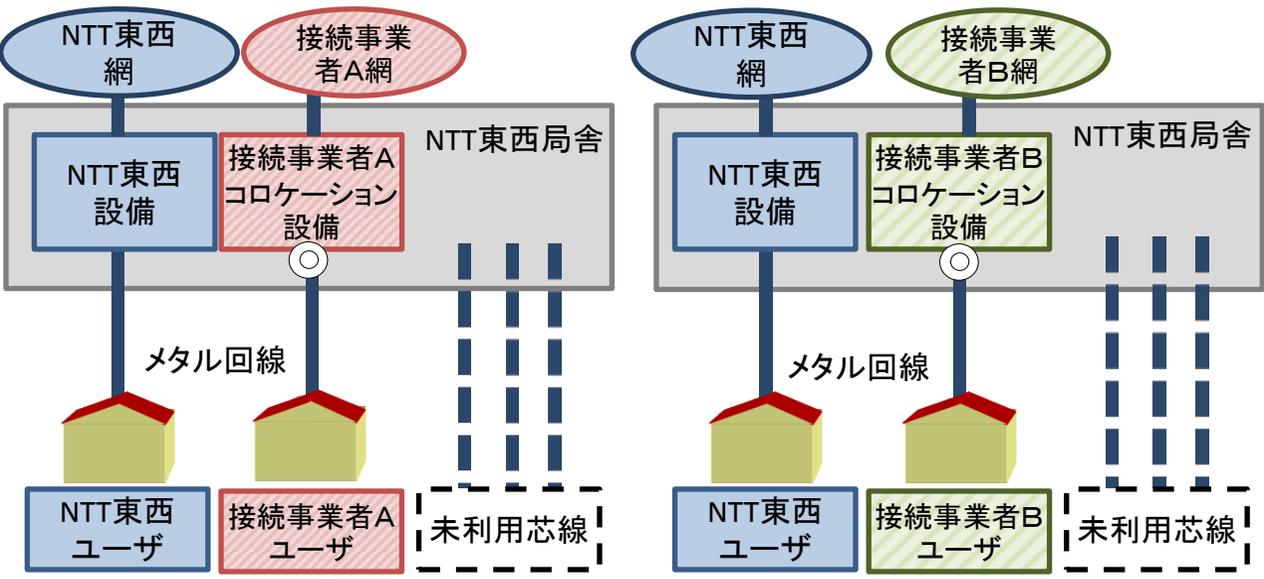
平成25年2月13日

メタル回線のコストの在り方に関する検討会  
事務局

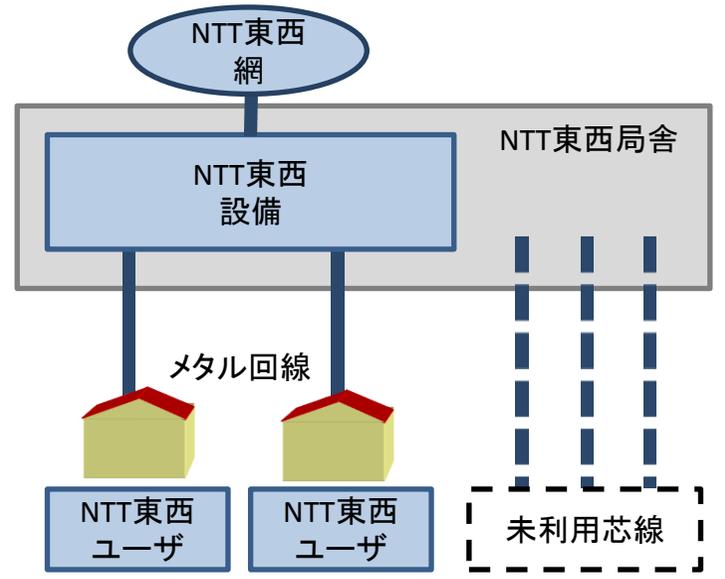
# コロケーションされていない局舎に収容されたメタル回線コストの扱い

- 情報通信審議会答申「ブロードバンドの普及促進のための環境整備の在り方」(平成23年12月20日)の意見募集に際しては、接続事業者より、6割を越える未利用芯線率による負担を適正化する観点から、DSLに係る設備がコロケーションされていない局舎におけるメタル回線のコストをドライカット接続料の原価から除外すべきとの意見があったところ、どう考えるべきか。
- コロケーションされていない局舎のメタル回線については、今後接続事業者により利用される見込みが低いことから、そのコストをドライカット接続料の原価に含めるべきでないという考え方があり得る一方で、コロケーションの有無により原価を区別することにより、公正競争環境を歪めるおそれがあるとする考え方もあり得る。

コロケーションされている局舎



コロケーションされていない局舎



(参考)コロケーションされていない局舎及び収容されるメタル芯線数の割合の例

	コロケーションされていない局舎数の割合	コロケーションされていない局舎に収容されるメタル総芯線数の割合
A県(NTT東日本)	43.3 %	11.1 %
B県(NTT西日本)	39.7 %	5.4 %

# コロケーションの有無によるメタル回線コストの区別に関する論点

- コロケーションされていない局舎におけるメタル回線のコストをドライカップ接続料の原価から除外すべきとの意見に対しては、①メタル回線を利用する事業者間の同等性を歪める、②ユニバーサルサービス制度の補填額算定方法等の見直しが必要との意見が提示されているところ。

## 論 点

### ①メタル回線を利用する事業者間の同等性

- ・NTT東西の加入電話や接続事業者も利用するメタル専用線とNTT東西のDSL及びDSL事業者等が利用するドライカップとでは、現在の接続料算定においても、ドライカップにおいて利用できない設備に係るコストについて区別され、接続料も異なっているところ。コロケーションされていない、接続事業者の今後の利用見込みが低い局舎のコストを区別し、そのコストをドライカップ接続料の原価に含めないという考え方はできないか。
- ・一方、設備に同一のエンドエンドのメタル回線を使っているにも関わらず、接続事業者の参入がある地域のみについて、NTT東西のDSL及び接続事業者が利用するドライカップがコスト負担することは、ドライカップは割安に、NTT東西の加入電話や接続事業者も利用するメタル専用線は割高にコスト負担することとなり、公正競争を歪めるのではないか。

### ②ユニバーサルサービス制度の補填額の算定方法等の見直し

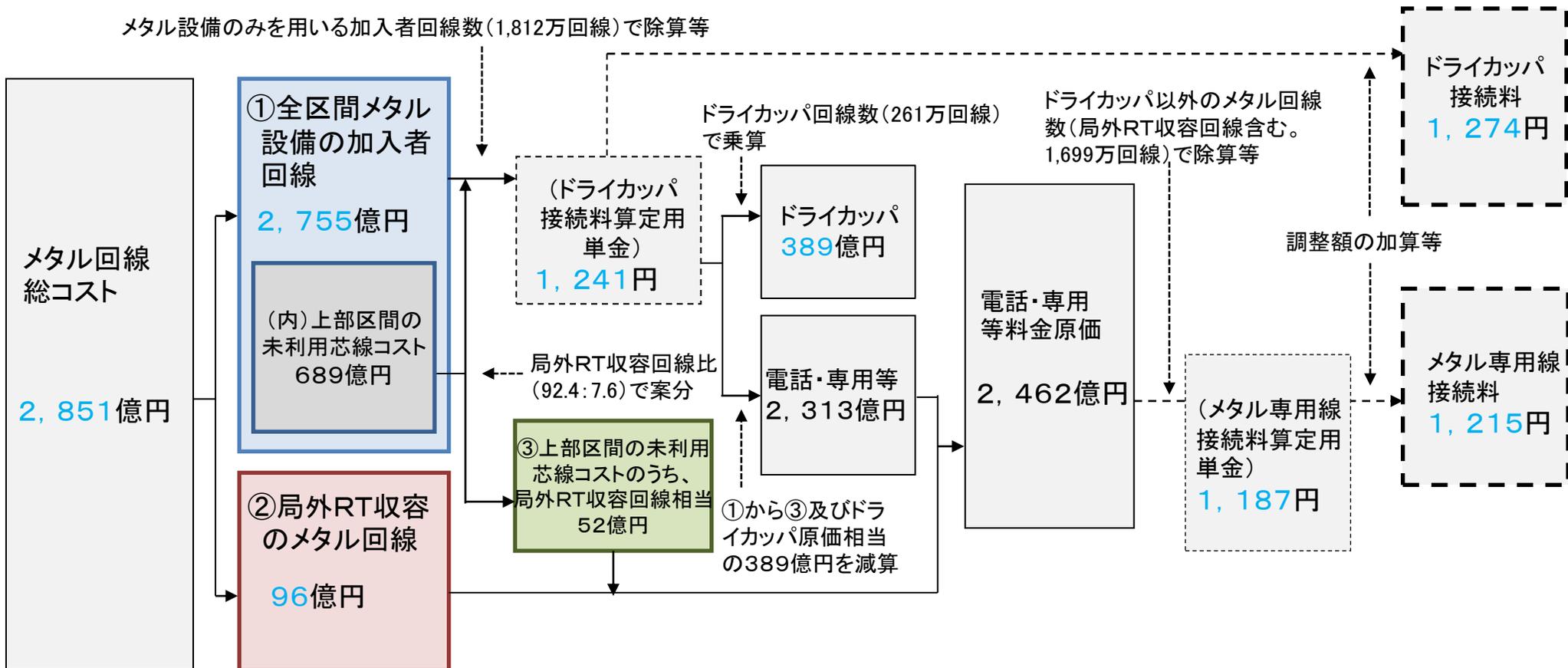
- ・コロケーションされていない局舎は、主に競争がない地域にあり、一般に平均よりもコストが高いと考えられるところ。このような局舎のコストを除いてドライカップの接続料を算定する場合、現在よりもNTT東西の加入電話のコスト負担が増加するため、ユニバーサルサービス制度において、局舎ごとのドライカップの需要も含めた設備量に基づき、モデルに基づき効率的なメタル回線コストを算出して平均化し、それに基づき補填額を算出している方法等を見直しをする必要を生じないか。

# (参考1)ドライカップ及びメタル専用線接続料の算定方法

- メタル回線接続料の算定においては、①その全区間がメタル設備のものと、②地下区間(上部区間)に光ファイバ設備を用いて局外RTに收容されているものにコストを分計した上で、①に含まれる未利用芯線コストのうち、局外RT收容回線相当のものを除いた額をドライカップ接続料の原価とし、その残額をメタル専用線(加入電話等に使用)接続料の原価としている。

## NTT東日本の平成25年度接続料(申請中)の例

メタル設備のみを用いる加入者回線数(1,812万回線)で除算等



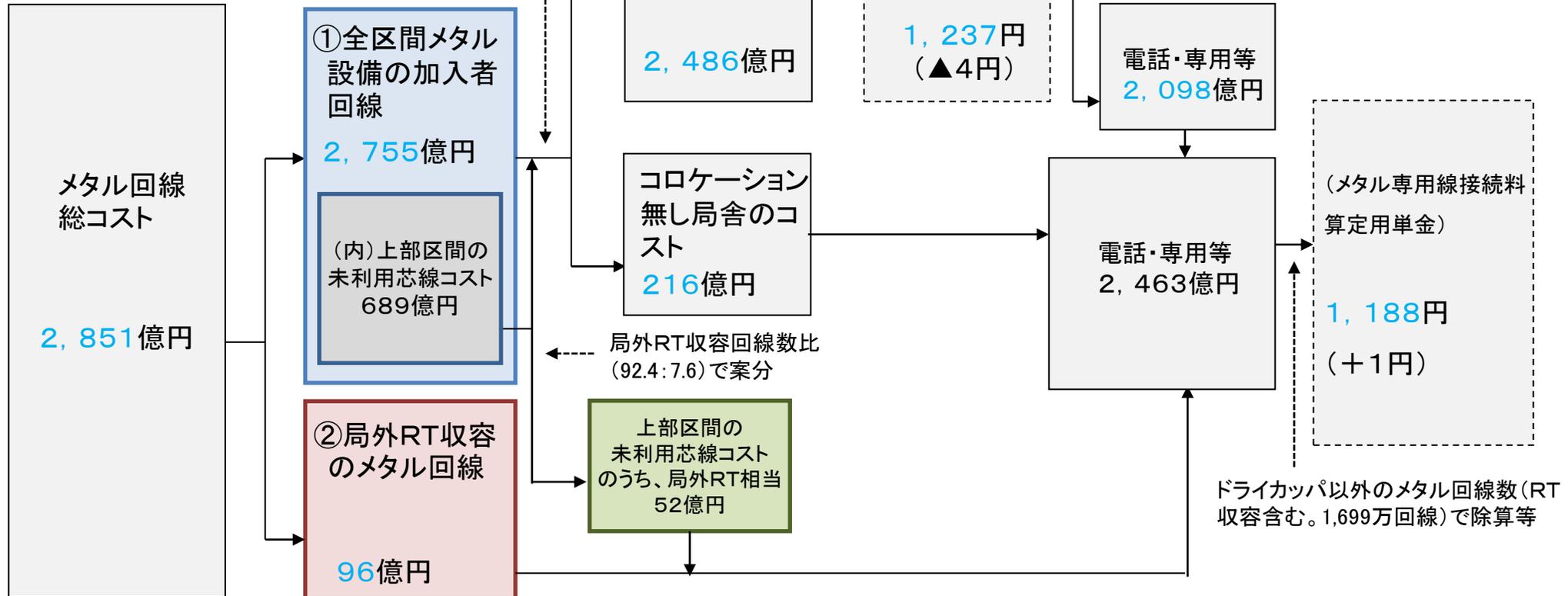
# (参考2)コロケーションされていない局舎に係るコストを除いた場合の試算

NTT東日本の平成25年度接続料(申請中)を基にコロケーション無し局舎収容メタル総芯線数を全体の8%と仮定して算出

直収電話の需要をNTT加入電話に合算した場合

コロケーション局舎に係る加入者回線数(1,675万回線)で除算等

メタル総芯線数比(92:8)で案分



## コロケーションされている局舎に係る加入者回線数の算定方法

コロケーションされている局舎に係る加入者回線数(1,675万回線)

$$= (\text{全区間メタル設備の回線}(1,812\text{万回線}) - \text{ドライカップ回線数}(261\text{万回線}) + \text{直収電話回線数} \times (167\text{万回線})) \times 0.92 + \text{ドライカップ回線数} - \text{直収電話回線数}$$

※NTT東日本の事業地域における平成23年度稼働回線数

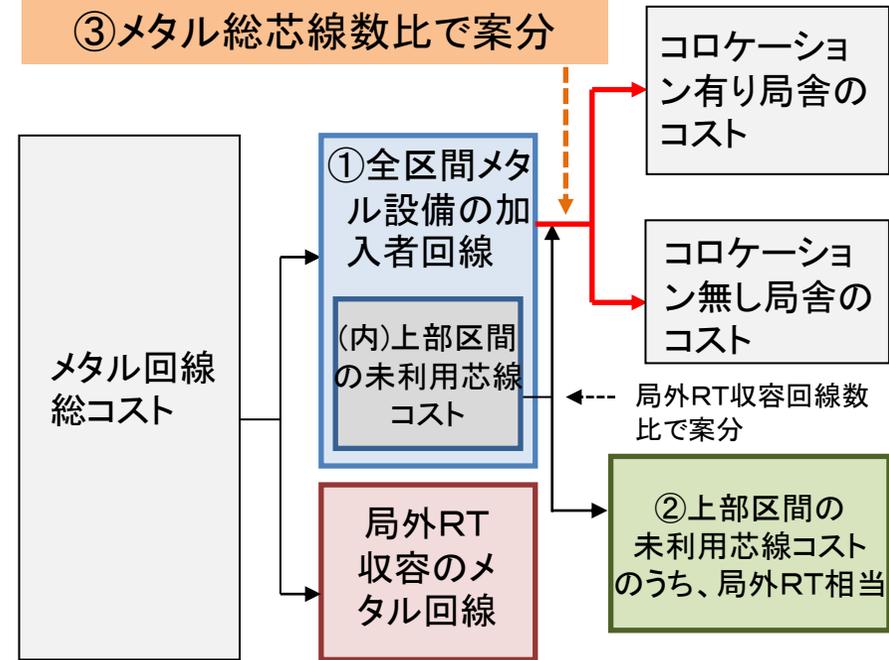
# (参考3) 試算において用いた費用及び需要の考え方

## 費用の算定の考え方

- ①全区間メタル設備の加入者回線のコスト(局外RT收容を除く)から②上部区間の未利用芯線コストのうち局外RT相当のものを除いたものを、③コロケーションされている局舎とコロケーションされていない局舎のそれぞれに係るメタル総芯線数比(\*)で案分

※ 試算においては、具体的数値としてNTT東西それぞれの特定の1県におけるコロケーションされている局舎とコロケーションされていない局舎のメタル総芯線数比の平均値を基に8%とした。

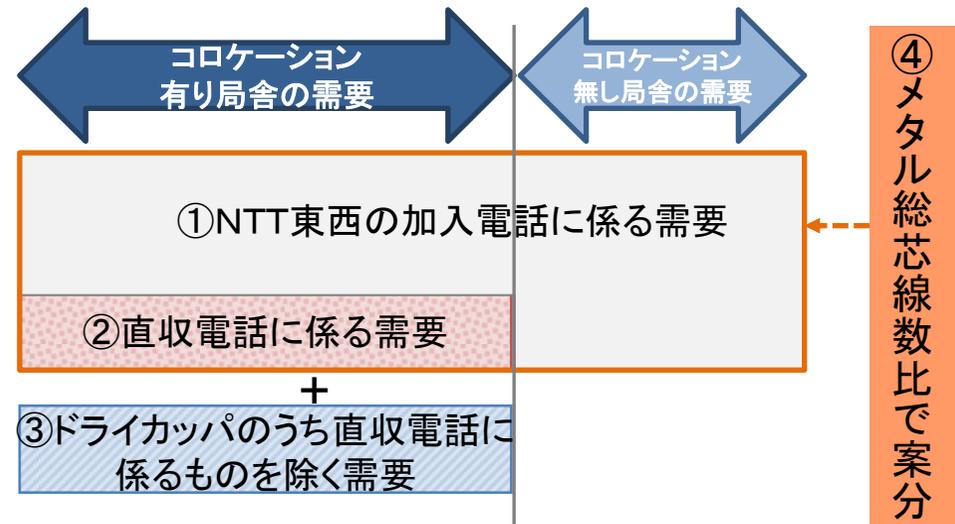
## ③メタル総芯線数比で案分



## 需要の算定の考え方

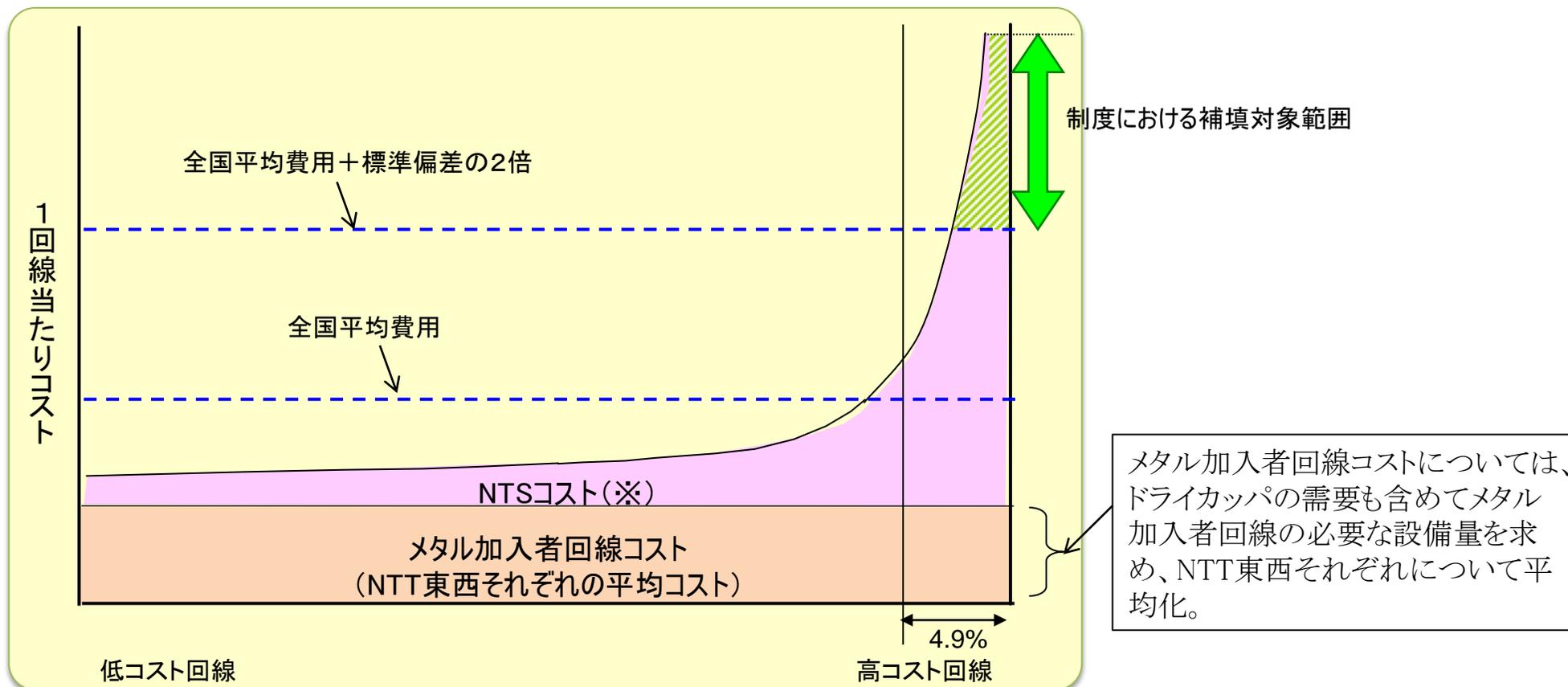
- ①NTT東西の加入電話及び②ドライカップを利用するサービスのうち直収電話の需要については、同じ電話の役務であるため、コロケーションの有無にかかわらず同様であると仮定し、費用の算定で用いた④コロケーションされている局舎とされていない局舎のメタル総芯線数比で案分

- ③ドライカップのうち直収電話に係るものを除く需要については、全回線数をコロケーションされている局舎に算入



# (参考4)ユニバーサルサービス制度のアナログ加入電話の補填額の算定の仕組み

- ユニバーサルサービス制度は、NTT東西による基礎的電気通信役務の提供に要する費用の一部について、赤字額を上限として一定の方式により算出された額を補填額とし、電気通信番号を利用する電気通信事業者が応分に負担し、NTT東西が受け取る仕組み。
  - アナログ加入電話(基本料)の補填額は、高コスト側上位4.9%に属する回線に係る原価と「全国平均費用+標準偏差の2倍」の差額により算定。
  - 当該原価は、NTT東西の非効率を排除するため、長期増分費用(LRIC)方式(※)に基づいて算定。
- ※ LRIC方式・・・ネットワークを最も効率的に、仮想的に構築した場合の年間コストを算定する方式



※ 第一種指定加入者交換機に係る設備のうち回線数の増減に応じて当該設備に係る費用が増減するもののコスト